



平成19年8月に発生し全国に広まった馬インフルエンザは、平成20年7月以降国内での発生がなく、平成21年7月1日付で農林水産省より国際獣疫事務局(OIE)に対して清浄化宣言が行われたことをご存知のことと思います。清浄化宣言がなされたとはいえ馬インフルエンザが日本からこれから全く発生しなくなったということではありません。馬の国際的な交流が盛んな現在いつ再発生をするか分かりません。そこで私たち馬管理者は馬インフルエンザの発生を予防するために予防接種を積極的に行なう必要があります。適切な予防接種の方法については、日本馬術連盟のホームページ内のJEF予防接種実施要領を参考にさせていただいてほしいです。日本では、馬インフルエンザ・日本脳炎・破傷風の予防接種を受けることが推奨されています。予防接種を受けることによってこれらの伝染病が発症しにくくなる、あるいは発症しても軽症ですむことが多いといわれます。私たちの大切なパートナーでもある大切な馬の健康管理の1つとして、3種類の予防接種を忘れずに行なうようにしてください。馬の伝染病に関する情報は、軽種馬防疫協議会のホームページにありますので参考にさせていただきます。(川嶋 舟)

会員募集のお知らせ

NPO法人日本治療的乗馬協会では会員を募集しております。会員になりますと定期的に発行されますニューズレターをお届けし、治療的乗馬の最新情報をお伝えします。また、研究集会や今後協会として企画を予定してい

ます勉強会などに会員料金で参加することができます。入会を希望される方は、NPO日本治療的乗馬協会事務局 03-3813-3819までお問い合わせください。

当協会の最新情報につきましては、当協会HP <http://jtranet.jp/> をご覧ください。

(2ページから続く) 例えば重度の肢体不自由と知的障害を併せ持つと言われている子どもやレット症候群の子どもの食事場面において、本人がスプーンやフォークをもち食べるという目的に添って実行されるように、手を添えて本人から出る動きに対して最低限の援助を工夫します。この援助を通じて本人は自分がそれを行ったという達成感をもつとともに、どのように自分の身体の動きを調整したら良いかということも学習する機会を持つこととなります。この援助を得て文字や文章を書き、自分の意思を表現したり教科学習に参加することができるようになった事例も報告されています。当初、この方法は本人の目的的な動作の表われを援助することから「表出援助」と呼ばれましたが、現在では、「触れる」というこの方法の特徴からソフトタッチングアシスタンス「軽く触れて行う援助」、略してSTAと呼ばれています。この援助方法が用いられるなかで、ことばが無い、ことばを理解していない、あるいは明確な意思が希薄であると見られてきた人々の多くが、明確な意思をもちながらもそれを他者にわかりやすい動作として実現することが難しいために、大変大きく誤解されているということが示唆されてきました。また、STAにより書く、描く、選択することなどが実現することによってこれらの子どもたちの表現やコミュニケーションに対する意欲が高まり、同時に周囲の人々にとって意図がわかりやすくなることによって相互の関係が大きく変わるといことも分かってきました。

【参考文献】『特別研究報告書 障害のある子どもの書字・描画における表出援助法に関する研究』：国立特殊教育総合研究所，2000 (滝坂信一)

日本治療的乗馬協会 ニューズレター 第4号

編集・発行 特定非営利活動法人 日本治療的乗馬協会

発行日 2009(平成21)年8月20日

事務局 東京都文京区白山1-20-4 ハウス白山ビル

電話：03(3813)3819

E-mail：office@jtranet.jp

ホームページ <http://jtranet.jp/>

(編集後記) 関東地方は早々と梅雨が明けましたが、日本列島は太平洋高気圧に覆われることなく、各地で大雨と低温の被害が出ていることに心を痛めています。動物の世界も異常気象と無縁ではありません。必要な時に適切な日照と降水、気温がないと植物は育ちません。今年はこの状態が続くと国産の麦や牧草が不作となってしまうでしょう。馬たちには責任がないのに安全な食を提供することができなくなってしまいました。私たちの治療的乗馬を行なう際の大切なパートナーである馬たちが健康にいてもらうためにも、私たちの生活を少し振り返り環境負荷を考えなければいけないのかもしれないかもしれません。梅雨明けの遅れに合わせたようにニューズレターの発行が遅れてしまいましたことをお詫び申し上げます。(川嶋)



「治療的乗馬」研究集会2009(第5回)開催のご案内

「治療的乗馬」研究集会2008(第4回)では、「一体としてのこころとからだ」を大会テーマに、約70名の皆様にご参加いただき、6題の実践および研究報告と協議が行われました。また、「動きからの気づき - フェルデンクライス・メソッドの考え方 -」(小川パメラ氏)、「人間の身体と身体の動きを心理プロセスとしてとらえる」(今野義孝氏)の内容で2題の記念講演を行いました。今年11月には、大会テーマを「馬という特別なパートナー その意味を知る」として、治療的乗馬では大切なパートナーとなる馬について考え、理解を深められる機会となるよう「治療的乗馬」研究集会2009(第5回)を

下記のとおり開催いたします。記念講演は、大会テーマにそって、馬を専門分野としてご活躍されている講師による講演を予定しております。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

「治療的乗馬」研究集会2009(第5回)

期日：2009年11月7日(土)・8日(日)

場所：オリンピック記念青少年総合センター

テーマ：馬という特別なパートナー その意味を知る

趣旨：私たちは馬が他の動物とは異なる多様な特徴をもち、だからこそ治療的乗馬、障害者乗馬という領域が成り立つことを経験的に知っています。今大会ではこの意味を今一度多角的に考えることをテーマとしました。

内容：○実践および研究報告と協議 ○記念講演

参加費：会員 一般 7000円 学生 3000円

非会員 一般 9000円 学生 5000円

※ 今回より1日のみの参加も2日間の参加と同額となりました。

※ 研究集会第1日目(11月7日)の日程終了後、懇親会(別途会費3000円)をオリンピック記念青少年総合センター内で予定しております。

参加登録期間：2009年9月1日～9月30日

演題登録〆切：参加登録後10月10日

※参加申し込みを希望される方は参加申込書を日本治療的乗馬協会ホームページよりダウンロードの上、参加申込書内に示されているFAXまでご送信ください。申込書は9月1日以降ホームページ上に掲載いたします。

※研究集会に関する詳細は日本治療的乗馬協会ホームページ内に掲載いたします。日本治療的乗馬協会ホームページは <http://jtranet.jp/> をご覧ください。

※研究集会に関するお問い合わせは、川嶋(研究集会事務局) schuk@jtranet.jp までメールでお問い合わせください。

トピックス

治療的乗馬研究集会2008
の質疑応答から 2

活動報告
ハーモニセンター 3

活動報告
あにまるネットワーク・ポニーズ 3

馬の健康管理の第一歩 4

2008年11月に開催されました「治療的乗馬」研究集会 2008(第4回)では、「一体としてのこころとからだ」を大会テーマとして、基調講演および研究発表が行われました。その中で活発な質疑応答がなされましたが十分なお答えができなかった質疑がございました。つきましては、研究集会の成果をより確実なものとするために質疑応答で話題となりました事柄の中から数項目についてまとめました。このまとめが、皆様の疑問を解決する手助けとなりますことを願っております。

○アフォーダンス (affordance)

合衆国の心理学者J.J.ギブソンがその論文「アフォーダンスの理論」(1977)と著書「視覚受容に対するエコロジカル・アプローチ」(1979)で述べた概念。アフォード(afford)は「～をもたらす」という意味だが、この名詞形が「アフォーダンス」だがギブソンがつくった造語。どのようなものかという、「外界の様々なものには私たちにとっての意味が既に含まれていて、私たちはそれによって行為を起こしている」という考え。例えば、「椅子が私たちに座るという行為をアフォードする」といったように使う。「棒を持つとついそれで何かをたたいてみたくなる(棒がたたくという行為をアフォードする)」とか、「馬の前に行くについ鼻面を手で撫でてしまう(馬の鼻面が撫でることをアフォードする)」とかいうように使う(考える)ことができます。日本では、佐々木正人氏(東京大学)がこの理論に強い関心を寄せ、多くの紹介をしています。

蛇足ですが、ちょうどこの論文が出た頃、筆者は、初めての環境に置かれた幼児がその新しい環境の中でどのように空間内を移動し適応に至るのかということとを大学院で研究していました。そのなかで、物理的な環境によって子どもの動き方が規定される、いや触発されているということに気づきました。これを論文に書いていたときに見つけた関連研究が「アフォーダンスの理論」(1977)でした。思えば30年以上も前のことです。

○ファシリテーター コミュニケーション (Facilitated Communication ; FC)

原語を訳すと「促進されたコミュニケーション」という意味になります。1970年代、オーストラリアの障害者施設で働いていたローズマリー・クロスリーは、脳性まひによる運動障害がある人々の手や腕をとり、彼らの手や腕の動きのスピードを調整してやることで、スイッチやキー、文字や絵カードを指し示すという目的動作がより適切にできるということに気づき、実践を行っていました。その後彼女は、脳性まひによる運動障害がある人々だけではなく、ことばや身振りサインそして文字による表出などが見られなかったり非常に少ない自閉症の人々に対しても同様な支援を始めます。そのなかで、これまで重度の知的障害を伴っておりことばの理解もできていないと見られていた自閉症の人々が、この支援を受けることによってタイプライターやパソコンキーボードを使いコミュニケーションができるという例が示されました。このことは、これら自閉症の人々の感じ方や思考過程が「健常者」と何ら変わらない可能性があることを示したのです。これらの実践はアメリカ合衆国シラキュース大学の教授ダグラス・ビクレンによって注目され、1989年以降、自閉症の人々のコミュニケーション支援方法として合衆国に紹介され新たな事例が多く報告されることを通じて世界的に注目されるようになりました。他方このコミュニケーション支援の方法は、本当に障害のある本人の意思が表現されているのか、それとも援助者(ファシリテーター)の意思が現れているに過ぎないのかという点で論争を巻き起こしてきました。しかし、外国の一部では手話通訳者と同様にFC援助者が公費で生徒につけられている例や、最終的に触れる援助無しにタイピングができるようになった事例も報告されていることなどから、今後、この援助方法の積極的な意味が検討され活用されていくことが期待されます。

【参考文献】Communication Unbound : Douglas Biklen, Teachers College Press, 1993

実は、これに非常に類似した事例の報告と検討が日本でも行われています。

○ソフト タッチング アシスタンス (Soft Touching Assistance ; STA)

1992年、神奈川県横須賀市にある国立特殊教育総合研究所の落合俊郎ら(当時)は、重度の知的障害や肢体不自由を併せもついわゆる重度重複障害があり描画はできないと見られていた子どもが、指導者が手の甲を軽く包むように触れて援助することによって描画動作が実現するという事例を報告しました。その後、同研究所の研究グループはこの援助方法が、描画だけではなく独力では目的的な運動動作が困難な障害のある人々に対する援助方法として有効であることを示しました。(4ページへ続く)

ハーモニセンター

1961年、十数名の青年が集まり「ハーモニサークル」としてボランティアグループを立ち上げ、こども会や養護施設訪問を開始、1964年に青少年団体「ハーモニセンター」が発足しました。その後1972年に「第1回北海道十勝ポニーキャンプ」を実施、現在まで続くポニーキャンプ@が始まりました。また、1973年には日本で初めての「ポニークラブ@」を開設、1976年に文部省(当時)青少年教育課許可の財団法人となりました。

主な活動として、①37年目に入ったポニーキャンプ@などの宿泊体験型子どもキャンプ②蓼科(長野県茅野市)、相馬(福島県南相馬市)、小貝川(茨城県取手市)の3つの自前のポニー牧場にて、地元の子どもの対象としたポニークラブ@活動③移動乗馬教室④「都会のど真ん中で馬に乗ったり小動物とふれあったりすることができる子ども動物広場」を、自治体から委託を受けて、または指定管理者として運営(現在6箇所)⑤モンゴル・ドイツとの国際交流の実施⑥ボランティアのキャンプリーダーの育成などを行っています。

第1回から30年余り続いているポニーキャンプ@には、たくさんの子どもたちが参加しています。子どもたちはキャンプに来ると、ポニーに乗るだけでなく、世話の部分もします。朝、起きてからまずポニーの餌をやった後、自分たちの朝食。それから自分たちの生活している場所(部屋やトイレなど)を掃除して、馬房(馬小屋)掃除に取り掛かります。大人からすれば臭くて面倒な気がする馬房掃除ですが、子どもたちは生き生きとした表情で、友だちとおしゃべりをしながら掃除を楽しんでいます。掃除が終わると馬装も自分たちで行い、いよいよ乗馬。乗馬では年齢・レベルにあわせた級ごとのレッスンに

なり、初級は楽しくポニーと接すること、中級は速歩中心で元気よく乗ること、上級は1人で馬房掃除や装鞍・乗馬ができる、というそれぞれの目標にあわせた練習内容となっています。もちろん乗った後



の手入れも、馬場をきれいにすることも夕餼いも自分たちで行っています。

子どものキャンプはこの夏で1430回を超えました。今では、子どもの頃にキャンプに参加していた、という親が、自分の子どもをキャンプに送り出す、ということも珍しくなくなりました。また、子どもとしてめいっばいキャンプに参加し、その後キャンプリーダーとして戻ってくる、という若者も数多くいます。

「子ども時代の豊かな野外体験活動」を1人でも多くの子どもたちに、と願い、ハーモニセンターはこれからもポニーと子どもが一体となった活動を中心に続けて行きます。

あにまるネットワーク・ポニーズ

「地域のコミュニティをめざして」

私たちNPO法人あにまるネットワーク・ポニーズは、上越市岡原の国道18号線沿線で”いちご牧場”という小さな牧場を運営しています。越後・頸城平野の田んぼに囲まれていて、そのまわりには黒姫高原・妙高山・斑尾高原と自然豊かな土地です。この牧場には、4頭のポニー、1頭の馬、やぎの親子、うさぎがいますが、その動物達とともに、障がいのあるなしにかかわらず、誰もが心豊かにくらす地域社会をめざして活動しています。牧場では、動物たちとふれあうことはもちろん、馬ふんを利用した農園で野菜やハーブ・いちごなどを栽培し、子供たちと収穫やアウトドアクッキングなどを楽しむなど、循環型環境教育の実践を行なっています。

”アニマルセラピー”という言葉どおり、動物に心を癒された経験のある方は多いと思います。特に子供たちの活動では、馬という大型動物とのふれあいを通して、優しい心や思いやりの気持ちを育み、実際に手入れをしたり、乗ってみたり、いっしょにゲームをしたりすることで、挑戦心がめばえ、達成感を味わうことで、自分に自信が持てるようになります。毎月行っている小学生のためのディキャンプでは、たくさん子どもたちがたくましく成長していくのを見るのが楽しみです。

ポニーズでは、障がい者のための”ホースセラピー”の普及・啓発活動にも力を入れています。今年から障がい児・者とその家族のための、ふぁみりーディキャンプを行っています。県内の養護学校や特別支援学級・通所施設などに案内を出したところ、新潟県全域から参加者がおり、こうした活動が必要とされていることをあらためて実感しております。参

加者の家族の方の感想の中には「障がいのある子供がいることで、周りの人の目を気にしたり、アウトドアなど今まで体験したことがなかった。ボランティアの学生さんに子どもを見てもらい、親はゆっくりアウトドアクッキングを楽しめた。普段見たことのない馬とこんなに近くでふれあえるこんな牧場は初めて！」など嬉しい感想を頂いております。この学生ボランティアたちも地元の教育大学や看護大学の学生達で、今ではポニーズの活動には欠かせない存在となっております。



ます。後輩や友達と仲間が少しずつ広がっていき、ありがたく思っています。

このほかにも企業や地域のイベントやお祭などに積極的に参加し、乗馬や馬とのふれあいなどを体験していただいています。地域の中で共に育つ、みんなの牧場を目指し頑張ります。皆様にお会いできるのを、馬、やぎ、うさぎ、人間一同、楽しみにしております！